

五十四期

担当者
角武彦
矢作雅男

・令和元年9月4日 54期永代神楽祭

次の通り行います。多くの皆様方のご参加をお願いします。

集合時刻・場所

13時30分 靖國神社参集殿

昇殿参拝 14時

なお本殿にエレベーターが設置され足腰ご不自由の場合も昇殿可能です。

・直会兼一水懇総会

当日開催予定です。別途ご案内状でお知らせします。

父を語る―長嶋鋼典の決意！(その一)

『戦争には勝ったかった』次男長嶋甲兵

私は7人兄弟の5番目で父がちょうど

40歳の誕生日生まれ。父が50歳で10歳60歳で20歳：そんな星の巡りもあったのでしょうか？ とにかく溺愛され、怒られた記憶が全くありません。その上父はどんな疑問にも即座に答える「博識な教養人」でありながら、一方で「おふざけ」大好きな変人であり、自分のことをめつたに話しません。父の経歴や戦争体験は全て母の伝聞でした。然したった2回だけ直接父の口から「戦争」について聞いたことがあります。一度は、父が62歳の冬脳血栓で半身不随になった時でした。母が妹の大学受験に付き添い、家を留守にしていた最中のことで、東京で大学生だった暇な私は静岡の病院に駆けつけ、一人で暫く父に付き添っていました。「天井が回る」「手を握ってみて」など容態を確かめるように、父は珍しく自分から話しかけてくれました。

そこで私は幼い頃から疑問に思っていたことを、思いきって切り出しました。「おとうさんは戦争に負けるって、いつ頃からわかっていたの？」と。父は少しきょとんとした顔で「負けると思ったことは一度もなかった」とあっけなく答えました。私は「わかってははず！」と食い下がりました。すると父は「負けるってわかって部下に命がけで戦えとはいえないよ」と答えました。20代の初めに中隊の指揮を任された父の、正直な言葉だったと思います。

二度目は父が亡くなる数ヶ月前、母に代わって付き添う時間がありました。そこで、まだ辛うじて受け答えできた父に「おとうさん本当は何をしたかったの？」と聞いたのです。母によれば父は戦時中「軍歌を作詞」したと聞いていたし、終戦後は「開拓農民」を経て「精神科医」となり、その後も「超心理学」など不思議な研究をしていました。本当は何がしたかったのか？ どうなりたかったのか？ 「父の本音」を聞いておきたかったのです。その問いに父は一瞬考え、ふざけたように「戦争に勝ちたかった」と言いました。意表を突かれたと同時に、やっぱりそうか！ という妙な納得感もありました。父は結局20代初めの「命がけ」で考え戦った日々の強烈な緊張感や葛藤、友との友情や部下への責任、家族への愛情と未来への希望、そして何より敗戦の悔しさを、半世紀以上たっても心の奥深いところに持ち続け、憶えていたのでしょうか。

私にとつて「戦争に勝ちたかった」が父の遺言になりました。

⑦ 7人兄弟・姉妹の中4人の方に書いてもらい逐次発表の予定です。（市川記）